

日本保育者養成教育学会 ニュースレター

■第9号■

The Japanese Society for the Study on Hoikusha Education

2024年10月26日発行 編集・発行 日本保育者養成教育学会

〒170-0013 東京都豊島区東池袋 2-39-2-401 (株)ガリレオ学会業務情報化センター内

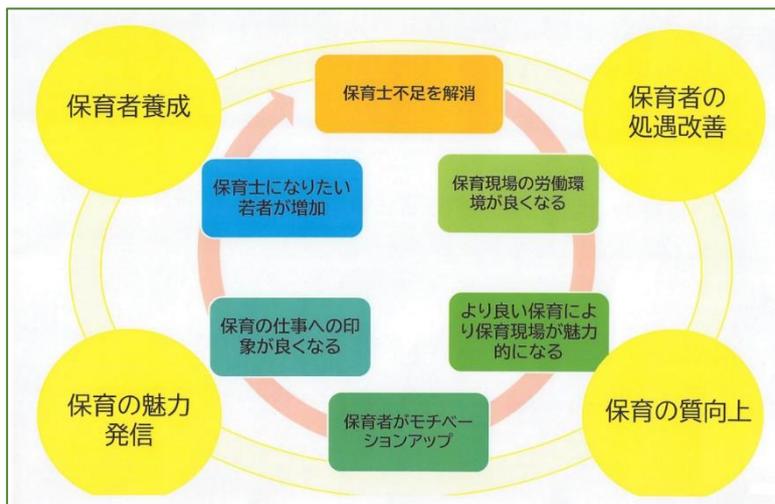
養成校—保育現場—行政の連携を

日本保育者養成教育学会
会長 石川昭義(仁愛大学)

保育者を養成する学科やコースが学生募集を停止したり、定員を削減するといった事態が各地で起きている。中には2年課程から4年課程にシフトする養成校もあるようだが、近年、保育者養成校の志願者・入学者が減少し、定員割れが生じているのが現状である。とりわけ、私学にとっては、学生の減少は経営面で大きなマイナスである一方で、保育者を養成するという社会的責任として、簡単に定員減や課程の閉鎖ができないという、いわば板挟みにあっている。

保育者不足、あるいは人気の低迷といった課題の解決は、養成校だけで解決できるものではなく、保育制度に係る課題、保育者の処遇に係る課題、養成教育のあり方に係る課題など、保育職全体を取り巻く諸課題の総合的な解決を図らなければならないのではないか。そのためには、養成校と行政や保育現場が課題を共有しつつ、今後の福井県における保育人材の需給関係を見通し、その安定的な確保に向けて協力・連携していく必要がある。このような理由から、この8月、「福井県保育連携協議会」が発足した。

この協議会では、図に示すように、三者が連携して、保育者養成、保育者の処遇改善、保育の質の向上、保育の魅力発信の4つのプロジェクトを進めることを通して、内側に示す効果の好循環を作っていくことを目標としている。



知事も出席した発足の会議では、さっそく、それぞれの立場から意見が出された。「給与は改善されているものの、子どもの命を預かる責任の重さと処遇にアンバランスがある」、「財政支援について、都市部と地方との格差解消を国に訴えてほしい」、「子どもの成長を感じられるやりがいのある職場であることをPRすべき」、「コロナ禍の中で中高生の保育体験がほとんどできなかったので、その機会を増やしてほしい」など、いずれも保育職とは何かを考えさせる視点であったように思う。

三者が一堂に会して協議する形態も画期的であったが、幼稚園、保育園それぞれの関係団体が同じテーブルにつくというのも画期的であった。就学前のすべての子どもの最善の利益並びに健全な育成のためには、種別の壁を越えて取り組まなければならないことの確認もできた。人口減少地域の課題、公私立園の役割分担など課題解決への道のは決して簡単なものではないと思うが、まずは一歩踏み出したことの意義は大きい。今後は、実務者レベルの会議を開催しながら、優先的に取り組む課題や具体的な施策について検討していくこととしている。

三者が一堂に会して協議する形態も画期的であったが、幼稚園、保育園それぞれの関係団体が同じテーブルにつくというのも画期的であった。就学前のすべての子どもの最善の利益並びに健全な育成のためには、種別の壁を越えて取り組まなければならないことの確認もできた。人口減少地域の課題、公私立園の役割分担など課題解決への道のは決して簡単なものではないと思うが、まずは一歩踏み出したことの意義は大きい。今後は、実務者レベルの会議を開催しながら、優先的に取り組む課題や具体的な施策について検討していくこととしている。

若い頃から憧れていた職業が、現実的な選択の中で薄れることなく、むしろ魅力となって若い人に受け止められるようにしたい。そして、保育者の仕事の意義を広く県民に理解してもらうようにしたい。当学会としてもこのような課題解決に貢献できればと思っている。

日本保育者養成教育学会 第 9 回大会について

日本保育養成教育学会 第 9 回大会
実行委員長 小泉裕子(鎌倉女子大学・鎌倉女子大学短期大学部)

2025年3月1日(土)に日本保育者養成教育学会第9回大会が、鎌倉女子大学・鎌倉女子大学短期大学部の共同開催で、久しぶりの対面による参集型大会を開催する運びとなり、現在準備を進めているところでございます。

第9回大会は、「保育職の社会的認知を高める未来戦略～VUCAの時代に生きる保育者像の創出～」と掲げました。

戦後の教育制度改革の中で、幼稚園の教員免許制度が整備され、大学における教員養成の課程認定制度の導入や、保母資格要件における厚生大臣から指定を受けた保母養成施設学校等の制度(当時)が確立して以来70年以上の歴史を刻み、養成教育の質改革が進められてきた中で、保育職への魅力が低迷する等、その社会的認知に対する状況は、今ほど危機に面していることはありません。

保育者養成教育は、今後どう進めば良いのか、従来の養成教育が歩んできた歴史的遺産にとらわれず、先の見えないVUCAの時代に、保育職が生き残るための戦略提案が喫緊の課題であると思います。

第9回大会では、保育者養成教育の未来像を描くに当たり、養成校当事者性を含む各界の視点を取り入れながら可視化的に課題を見だし、保育者養成教育の活力を再生する契機となることを願ってやみません。

さて、今回の大会は2つの基調講演を始め、皆様の日頃の研究成果を発表する場を「ポスター発表」と限定し実施することに致しました。懇親会も予定する中で、VUCAの時代を見据えた保育者養成教育のあり方について、自由闊達な討議が行われ、全国の会員の皆様との有意義な交流の場となるよう担当校として準備に当たって参りたいと思います。

多くの皆様のご参集を心よりお待ちしております。

第9回大会情報

<http://www.h-yousei-edu.jp/taikai/>

鎌倉女子大学

<https://www.kamakura-u.ac.jp/>

日本保育者養成教育学会 第8回研究大会を終えて

第8回研究大会
実行委員長 保坂 遊(東京家政大学)

日本保育者養成教育学会第8回研究大会は、コロナ禍以来、引き継がれて参りました“WEB(オンライン)”方式ならではの利点を活かして開催させていただき、令和6年3月に無事終了いたしました。これもひとえに発表や参加をしてくださった会員の皆様、大会を企画当初からサポートしてくださった大会運営事務局(名鉄観光サービス株式会社 仙台支店)の皆様、そして大会を支えてくれた実行委員会のスタッフのおかげです。

だいぶ時間が経ってしまいましたが、あらためましてここに感謝申し上げます。皆様、誠にありがとうございました。

第8回研究大会におきましては、大会テーマを「保育者養成教育の近未来」と掲げました。シンポジウムでは、こども家庭庁の高辻教育・保育専門官、神戸大学大学院教授の北野幸子先生、そして仁愛大学教授で本学会会長の石川昭義先生にシンポジストとしてご登壇頂きました。そのうえで、大会テーマと同テーマにより、眼下の現実を直視しつつ、行政・学界・学会それぞれの視座からご発題いただき、保育者養成教育の諸種の難題解決を実現可能にする方略はいかなるものかということについて、真摯かつ闊達な論議をいただきました。

また、口頭発表・ポスター発表等の各プログラムでは、保育の近未来を担う保育者養成教育のあり方について自由かつ闊達な討議が行われ、充実した研究発表の場となったのではないかと存じております。

第8回研究大会では、皆様方のご研究から、実に沢山のことを学ばせていただきました。保育者養成教育に携わる者として、今回のテーマを今後も考え続けて参りたく存じております。

次回の学会からは、久しぶりに対面型の学会開催が行われるように伺っております。今後の大会企画・運営につきましても、なにとぞよろしくお願い申し上げます。最後に重ねて御礼申し上げます。第8回大会へのご協力とご支援を賜り、皆様、本当にありがとうございました。

特集 養成校と保育現場との繋がり

1. 研究者・養成校教員として

保育実践とつながる = 保育実践から学ぶ

門田理世(西南学院大学)

私の日本での実践理解は、北九州市立幼稚園の先生方の元での学びから始まりました。アメリカで幼児教育の勉強を終えたばかりの私に、北九州の先生方を紹介して下さい、日本の幼児教育を学びなおすことを指導下さったのは小田豊先生でした。

「1000 時間観察すれば少しは保育のことが見えるようになる」

このご指導を頼りに可能な限り園を訪れ、実践を見せて頂きました。たくさんの疑問点や不思議に思うことに出くわす度に、先生方に教えを乞い、時には協議の時間を頂き、ただただがむしゃらに子どものこと、保育実践のことを学ぶ。厳しくもあり、きつくもあり、楽しくもあり、嬉しくもあり。私自身が研究者として実践から学ぶことの大切さが身に染みた 2 年間でした。そして、この時に私が得た最大の学びは、『答えは実践の中にある』ことを楽しむ感覚を得たことです。

先生方が下さった 1000 時間という観察時間は、今振り返ってみれば、私自身が実践をどのように楽しむかの時間であったといえます。そういった意味では、子どもの遊びと似ていたかもしれません。様々な工夫を凝らし、知りたいと思うことを見聞きし、知らなかったことに気付かされ…それが面白くてやめられない。観察を終えて、先生方との話が始めると帰りの新幹線の時間が疎ましく思える。走って駅まで行く途中も頭の中がぐるぐるしている。保育に正解はないのですが、「きっと何かがあるに違いない」を繰り返すことの贅沢に感謝していました。そんな日々の中で先生方との関係性は深まっていき、約 20 年を経た今も、時折お会いしては保育の話に花を咲かせています。

実践の場とつながるには、まず、実践を見せてもらうことから始めることが肝要ではないでしょうか。そのきっかけは何でもいい。「勉強させて下さい」とお願いしても断られてばかりであった当時とは違い、今は研究者と共に学ぼうとする保育文化が芽吹きつつあると思います。一緒に保育を語る面白さが共有できる仲間になるには、研究のためだけではない関係性を築くことが大切だと実感しています。

私がここ 10 年程、先生方とのかかわりで楽しんでいるのは、教育方法論の授業です。園の先生方が授業に参加して、学生たちと一緒に、子どものこと、環境構成のこと、職場の人間関係のこと等、ワイワイ話し合いながら皆で保育への共通理解を深めようとしています。こうしたつながりが可能であるのは、地域に根差した関係性を大切にしながら、皆で「私の答えを見つけようとする」実践を見るまなざしを養おうとしているからだと思います。

「1000 時間観察させて頂いたおかげで少しは保育のことが見えるようになったと思います」と小田先生に報告したいところですが、「時間だけではない…」と次の指導が聞こえてきそうな気がします。「時間でなければ何なのか？」その答えを見つけに、また、実践から学ばせてもらいに行こうと思います。

保育者養成と現場とのつながり

北野幸子(神戸大学大学院)

保育者の人材不足が深刻な話題となって久しい。現場の保育者等も、保育者養成者も共に多忙を極めている。その中において現状を打破するためには、私たちはさらに実践現場とつながり、関わり、理解を深め、互恵的な連携協働を図っていくことが大切であろう。つながりを深め継続するには、それによってもたらされる機能や得られるメリットが互いにあること、そして互いに尊敬しあい、学びあう形のものであることが鍵であると考えます。

私が、保育学を専攻しはじめて 36 年が過ぎた。大学教員になって 27 年になる。拙い経験ではあるが、自分と保育現場の方々とのつながりの在り方の変化を振り返りながら、今後の自分への宿題を考えてみたいと思う。

当初のつながりは、大学の授業の一貫として学生を現場に引率したり、学生とのイベントや、研修のワークショップを実施したりといったものが多かった。当初は、授業や本務と重なっており、与えられたつながりであったと思う。忙しさを理由に当事者意識も低く、また経験の浅さと自信のなさから積極的な提案もできず、自分の果たせる役割、自分のやりたいこと等への意識も低かった(といっても今、自信があるわけでは全くないが)。

研究代表者として研究をデザインしたり、修士論文や博士論文の指導を担うようになってから、現場との繋がりが、まず継続的になった。加えて、実践研究をなぜ行い、その成果をどう伝え、自分が何をしたいのか、より当事者意識や使命感が増していったように思う。

目先の利益にのみ目を向けるのではなく、より俯瞰して見られるようになり、つながりの在り方がさらに変わったように思う。実践現場にとって意義があるか、私にとってやりがいがあるか、研究としての価値があるか、それがこの地域の制度改革や実践の質の維持・向上につながるのか、を考えるようになった。

つながりの多層的な機能をしっかり見据えることは重要であろう。現場にも私たち養成者にとっても、互恵的な関係性を構築していくことにより、価値の共有が深まり、目標の実現に

つながる協働へと発展していく。実践現場こそをつながりの場とし、それぞれの専門性や機能を尊敬しあい、そして、お互いに得るものがあることをしっかり自覚して去ることが、つながりの鍵であると思う。

10年以上のスパンで地域の実践現場とつながり、表面的ではなく継続的に、そして不屈の精神で、全ての乳幼児に質の高い教育をという権利保障を目指す。現在ではさらに大きなビジョンを持つようになり、創造をもたらすつながりへと変化してきたように思う。地元での園種公私を超えた連絡協議会の創立や、知事認定制度、予算の拡大など、つながりが深く強く長いからこそその成果が少しずつあげられつつある。大変な現在であるからこそ、益々私たち一人ひとりの意識改革と行動が求められていると考える。自分の今後の宿題でもある。

保育者養成と現場とのつながり

矢藤誠慈郎(和洋女子大学)

「保育者養成校と現場のつながり」という問題設定じたいが、養成と現場が別物だという前提に立っており、保育者養成の根本的な課題を示唆しているように思う。

例えば看護師養成の場合、看護師養成課程の教員は看護師が大半であり、養成教育は自分の職業の後進を育てることである。看護師がそのキャリア選択の過程で縁あって養成の側に立つ。実務家でありながらアカデミズムにも踏み出していくわけである。

保育者養成校の教員は、実務家を経ている場合も少なくはないが主流ではなく、アカデミズムにおいては、保育を主戦場としているわけではない教員が少なくない。つまり養成校教員にとって、保育現場は自身が働く内なるフィールドではなく、実習など業務上のフィールドの一つであり、また研究の対象であって、外なるフィールドであろう(この距離感は実に多様ではある)。

看護師の臨地実習には看護師でもある養成校教員が現場を共にする時間が確実に、そして大いに確保される。保育者養成の実習における訪問指導は、例えば指導保育者の話を聞いた後で実習生の保育を観察して、実習生と成果や課題を共有したうえで、改めて指導者とすり合わせをしてその後の指導をお願いする、といった丁寧な手順を踏むケースがある一方で、手土産を渡して名刺交換をして簡単な立ち話のみで実習生にも会わずに次の訪問先に向かう、といったケースもあるようだ。それは養成校教員がおざなりに行っている場合もあれば、実習園の方が時間と場所を用意しない場合もある。まずは養成校と現場のこうした貴重な機会に率直かつ十分なコミュニケーションによる相互理解の機会としなければならないだろうし、共通のスキームの確立が求められる。

そして高等教育への進学率が80%を超え、多様な学生が入学してくる養成校が、次代を担う保育者をよりよく育てるためには、養成校だけではもはや立ち行かないと思われる。一方で保育者のキャリア開発も現場だけでは困難だ。「架け橋プログラム」よろしく、養成教育と現職

研修の接続を図ることが望ましいだろう。接続の具体的なあり方としては、相互の風通しを良くすることを目指したい。現職の保育者が養成校の教育に、実習だけでなく授業等でも関わる、養成校教員が現職研修に貢献するといった互恵的な関係性を構築しつつ、例えば実習指導について共に考え合う場を定期的に設定していくなど、依頼する／されるといった立場の落差を超えて、保育者の専門性を高めるという共通の目的の下で、対等に、率直に対話を積み重ね、育成方法の開発に協働して取り組んでいくべきであろう。また、それが子どもの最善の利益の実現に近づく方策の一つだと理解しておきたい。

2. 授業実践の中で

学生の学びと子育て支援を相互に活かす取り組み

加古 有子(名古屋学芸大学)

(名古屋学芸大学ヒューマンケア学部附属子どもケアセンター)

名古屋学芸大学ヒューマンケア学部附属の子どもケアセンターは、愛知県日進市の子育て支援センターとして、就園前のお子さんと保護者の方々に利用されています。幼児保育専攻の学生たちは、授業やボランティア活動を通じ、保育士の見守りや支援のもとで、親子と触れ合ったり、託児を体験できたりします。

附属の子育て支援施設や幼稚園を持つ大学は珍しくないと思います。しかし、特筆すべきは、子どもケアセンターが、講義室や食堂のある建物内に併設されていること。しかも、建物の出入口と階段、エレベーターホールに囲まれるような位置にあります。学生たちがもっとも頻繁に通るところで、子育て支援が行われているのです。学生たちは、普段から親子の姿を間近で見ることができます。食堂で隣のテーブルのお子さんに微笑みかけたり手を振ったりすることもあります。このような環境のもと、もっと親子と関わりたいという意欲を高め、子どもケアセンターでのボランティア活動に参加する学生もいます。

さて、子どもたちがお兄さんやお姉さんを慕うのはもちろん、子どもケアセンターを利用される保護者の方々にとっても、学生の存在は大きいようです。子育ては楽しいことばかりではありません。イヤイヤ期の子どもに振り回され、疲れてしまうこともあるでしょう。しかし、子どもケアセンターに行けば、学生たちが「かわいい」と喜んでくれます。この「かわいい」の声によって、保護者もお子さんのかわいらしさに改めて気づき、子育てを通じて味わう幸福感や充実感を思い出すことができるのです。また、自分たちの存在が学生の学びにつながる、自分たちは未来の保育者を育てている、社会に貢献している、というように、学生との触れ合いが、保護者の自己肯定感を高めるという側面もあるようです。

このように、子どもケアセンターの併設によって保育者養成と現場が地続きとなり、学生の学びと子育て支援が互いに良い影響を与え合っていることがわかります。学生が主体的・実践的に学ぶことが地域貢献にもつながるという点が本専攻の強みだと言えます。

この強みをさらに活かすために、2023年度から1年生前期で「保育職キャリアデザイン I」という授業が始まりました。この授業は、子どもケアセンターでの観察や体験を通し、学生たちが保育職の役割や意義を具体的に理解し、保育職を目指す意欲を高めることを目的としています。大学生活がスタートする時期に、学生たちが子育て支援の現場に触れる意味はとて大きいと思います。学生のレポートからも、親子と関わる機会を貴重なものとして捉え、学びを深めていることが読み取れます。この授業が始まってから、子どもケアセンターのボランティアに参加する学生が増えています。今後も、学生の学びと子育て支援が相互に生きる取り組みを続けていきたいと思います。

3. 卒業生への支援

保育養成と現場をつなぐ —卒業後の教育や保育者研修についての取り組み—

小島千恵子(あいち保育研修研究協議会)

愛知県には、2001年まで保育士養成と、現職の専門性の向上を図るための研究課程がある県立保育大学校があった。研究課程には、園長・主任の50日間2コースと、中堅20日間1コースが設定されていて、保育に従事しながら、保育を学び直し主題研究に取り組んでいた。愛知県は、保育大学校の閉校に際して、研究課程を県内の複数の保育士養成施設が協働する形で引き継いだ。その後、2015年には県下の養成施設30余校が会員となり一般社団法人化され、文部科学省の人材育成プログラムに採択されるなど、様々な保育士研修事業に関わり24年目を迎えている。2023年12月に法人は解散となり2024度からは、以前の養成施設の協働という形に運営を戻し、「あいち保育研修研究協議会」(以下、協議会)として再出発した。協議会では、愛知県の委託を受けて現任保育士研修事業を継続する他、公私立の区別なく保育現場を巻き込みながら、研修の検証も含めて、保育研修のあり方について検討を始めている。

筆者も公立園の保育士(主任)であった頃、研究課程で保育の学びを深め、主題研究に取り組んだ経験がある。保育に従事しながら、自分の保育と向き合い振り返ることができたことは、専門職の資質や能力の向上につながったと認識している。また、保育養成施設の教員となってからは、研修の運営や研修講師として携わり、その経験は活かされている。

この研修は、養成施設が会場となり、教員が研修講師を務めている。卒業生との再会も多いことから、養成から卒業後の保育者教育につなげていくことができる保育者研修であると考えられる。研修は、保育士としての経験や職務、専門に応じた学びを深めることができるもの、保育施設の多様化や保育の今日的課題に対応するものが、講義・演習の形式で次のように構成されている。

- 経験・職務別研修：園長研修・主任保育士研修・新規採用保育教諭インストラクター養成研修・初任保育士研修(尾張・三河会場)・中堅前期保育士研修・中堅後期保育士研修。
- 専門・課題別研修：育児休業明け・職場復帰者向け保育士研修・3歳未満児の保育研修・障害の理解と保育研修・認可外保育者研修。
- 保育の今日的課題研修：公開講座。

愛知県現任保育士研修 <https://www.aichi-gennin.jp/>

研修は、愛知県からの委託を受け、基幹校が中心となって県と調整しながら、協議会役員の運営会議で計画を立てて実施している。研修毎に養成施設を会場として、養成施設がチームを組み、研修準備～修了までを担って行っている。シラバス、事前アンケートを実施して準備を行い、事後アンケートを実施して振り返りを行い、次年度の研修に反映するようにしている。毎年、県のプロポーザルに参入して採択されての実施であるため、研修実施が継続できる保障はないという現状の中での研修実施という課題はあるが、養成施設が協働して実施しているからこそ受講生の事後アンケートに加えて、保育現場の声を反映した研修が実施できるのではないかと考える。保育現場は、深刻な保育士不足を抱えながら、子どもたちの最善の利益を保障するための保育所等の運営水準の向上や、保育士の資質を高めること等、保育や保育者の質を確保することに日々翻弄している。この現状を踏まえて今、保育の質向上について、養成と保育現場が連携・協働して検討を重ねていくことが必要だろう。

三河保育研究会の取り組みにおける現場との連携について

奥園知明・渡部努(岡崎女子短期大学)

岡崎女子短期大学は、愛知県岡崎市で半世紀以上の歴史を持った子ども教育に特化した単科大学です。本学は、岡崎女子短期大学のネットワークを生かし、愛知県三河地域の保育の質の向上を目指して、“保育者”と“保育現場”、“養成校”とつながりながら共に学び合う場として、「三河保育研究会」を令和3年3月に設立し、今年で4年目を迎えました。広く親しまれるように、三河の“三(さん)”と保育の“保(ぼ)”をとって、通称「さんぼの会」と呼んでおります。現在の会員数は、本学の卒業生を中心に642名(令和6年8月1日時点)となっています。

設立の趣旨としては、①さまざまな視点からの保育研究・社会の保育ニーズ・保育実践を知ることができる、②保育者同士、保育者と学生のつながりをつくることことができる、③保育者・学生・大学教員がそれぞれの視点で課題に向き合い支え合って学ぶことができる、ことが挙げられます。

立ち上げ当初は、コロナ禍真っ只中ということもあり、設立総会はオンラインで実施しました。和洋女子大学教授 矢藤誠慈郎先生による「記念講演－地域を開く、地域で学び合う」、三河地域3市によるシンポジウム「共に支え合って学ぶ 三河地域の実践」など、多くの先生方のご支援・ご尽力のもとスタートいたしました。

初年度は、感染症対策に注意を払いながら、コロナ禍の保育を考える交流会やワークショップを実施しました。その折には現場の先生方の一助になればと、コロナ禍の保育のアンケート調査を実施し、その結果を会員の先生方と共有しました。その後はコロナ禍以前の状況が戻りつつあり、土粘土や絵の具をテーマにしたワークショップ、職階別交流会、参加者全員で考える事例検討会、保育現場の“なぞルール”をテーマにした研修会・交流会など、定期的を実施してきました。ご参加いただいた方からは、「日々悩んでいる内容を共有し、考えることで園に戻ってできることが見えてきたように思いました」「研修の内容を保育士間で共有し、一人一人の思いを大切に楽しく保育できるようにしていきたいと思いました」などのご意見もいただき、企画後には定期的に会報をメール配信するなどの情報公開も行っています。また在学学生も研修会やワークショップに参加し、学生にとっても保育現場の先生方と一緒に交流しながら実践的に学ぶことができる場にもなっています。

これからの社会を担う子どもたちのより良い育ちのために、“保育現場と養成校”、“保育者と学生・教員”の垣根を越えて協働し合っていくことで、地域の保育がさらに豊かになっていくことを願っています。今後も「さんぽの会」が、「保育の“いま”を学びたい」「保育現場の先輩や後輩の話が聞きたい」「気軽に学べる場がほしい」といった保育者のニーズや思いに応える場、継続的に語り合える場となるように、共に学び・成長していきたいと思えます。

■三河保育研究会「さんぽの会」 | 岡崎女子大学 | 岡崎女子短期大学オフィシャルサイト

<https://okazaki.ac.jp/community/stroll/>

■岡崎女子大学・岡崎女子短期大学公式サイトです。学校紹介、学部・学科、研究活動、キャンパスライフ、進路・就職など、岡崎女子大学・岡崎女子短期大学の情報をご覧ください

<https://okazaki.ac.jp>

卒業生支援とは、なにか

加藤次郎(千葉明德短期大学卒業生支援協力員)
(元千葉明德短期大学／元槇の木学園)

2010年、本学(千葉明德短期大学)による【卒業後5年間の就業力育成支援プログラム】が、文部科学省による『大学生の就業力育成支援事業』に選定されました。それぞれの教職員が、就職先の園長さん、施設長さんにごあいさつを兼ねて、卒業生本人の仕事ぶりを拝見しに行っています。それをきっかけとして私も卒業生の就職先を訪ねるようになりました、

卒業生たちは、母校の先生たちが職場を訪問し就職先の園長さん、施設長さんと立ち話をしている風景をみながら、保育に励んでいる自分を感じているのではないのでしょうか。

プログラムを始めて数か月後、卒業生Aさんは弱気な気持ちになり、ふと、職場を訪問してくれた教職員が思い浮かんだようで、Aさんが親しかった教員宛に“職場では話しにくいので、短大で私の話を聞いてくれませんか？”というような内容のメールが送られてきました。その教員と私は時間をあわせ、じっくりAさんの胸の内を聞かせていただきました。すべてを吐き出すことにより、胸のたまりが軽くなっていくようでした。たしかに職場では言い出せる話ではありません。でも母校では…Aさんがバラバラに入り混じったジグソーパズルすべてのピースを出し尽くし、先生と一緒に並び変えていく…するとだんだん絵文字が見えかけて、そうか、そうだったのか、こんな絵姿だとは思いませんでした…この絵姿なら、私一人でも並べられそうです…そんなことを、Aさんが感じていたように思いました。

久しぶりに母校に里帰りして話し始めた時のAさんは、うつむきがちのどことなく重い表情でしたが、私たちとの話が終わった後は、なにかが吹っ切れて明日からの勤務に元気が湧いてきたようでした。その表情は、不思議なことにまるで木漏れ日がさしたようだったことを今でも覚えています。

卒業から就職…野球で喩えるならファームから一軍に移籍するようなものでしょう。一軍で活躍するためには、職場の人びと(幼児、児童、青年、成人、保護者、職場の同僚、上司など)に、何から何まで対応していく「対人援助力」を培うことが求められます。でもファームから移籍してすぐ＝卒業して間もない若者が、自分だけでその「対人援助力」を修得するには限界があります。

Aさんは一人きりでうつむいていましたが、幸いにして、母校の親しい先生にわだかまりを漏らしているうちに胸の苦しみが軽くなり、明日の朝、保育の園児たちを笑顔で迎え入れることができそうな気持ちになりました。

Aさん一人では、その胸の苦しみから抜け出すことは困難でした。それでも母校の親しい先生との再会によって、持ち直すきっかけができました。自分一人で悩んでいる時は苦しくとも、自分にとっていちばん話やすい人を思い浮かべて、話を聞いてもらえると、不思議なくらいに

表情(内情)が好転するものです。(それは必ずしも先生である必要はありません。気の合った同僚、先輩などでも一)。

本学では、卒業生のいる職場を訪問し、なるべく園長さん、施設長さんとも語り合うようにしています。その語り合う様子を(離れた場所から)卒業生に見せていると、その後園長さん、施設長さんと話しやすくなると思うからです。入園したての子どもが、親御さんと仲良そうに話す保育者に親しみを感じるのと同じですね。

そうして時には母校に足を運び、親しい先生と近況を伝え合い、悩みを吐露しているうちに、卒業生自身が「対人援助力」を習得していくのだと思います。

「対人援助」とは、他者(幼児、児童、青年、保護者、同僚、上司など)をいたわることです。そして、本心で“いたわりあう二人”のことを“人間”といいます。

卒業しても、短大生としての退路を断ったわけではありません。いつでも短大=母校に帰ってきていいのです。

4. 保育現場から

保育者養成校と保育現場のつながり

渡邊玲(岐阜県私立幼稚園連合会/清流塾)

令和元年に幼児教育の無償化も始まり、幼児教育は単なる小学校の準備期間ではなく、幼児期に遊びや生活から学ぶことの重要性が見直されています。岐阜県においても、幼小連携として小学校への接続事業が展開され、幼稚園には多くのことが期待されるようになってきています。

一方で、幼児教育の担い手である幼稚園教諭のなり手不足が顕著になってきている現状があり、岐阜県私立幼稚園連合会では、これまでも教育実習や、毎年連合会主催で行う就職ガイダンスを通して、学生の皆さんに幼稚園教諭として働くことの魅力を伝えてきました。しかしながら、就職ガイダンスの参加者は10年前と比しても半分以下となっており、幼稚園教諭を志して教員養成校に入学し幼稚園教諭・保育士の資格を手にしても、サービス業を始めとした他業種へ就職していくケースも増えています。

岐阜県私立幼稚園連合会には、後継者育成委員会「清流塾」があり、各幼稚園の運営を後継していく者、又は後継して間もない設置者・園長が、情報交流や自己研鑽のための研修を行う組織があります。令和6年度現在、県内95園のうち35名程が塾生として登録しています。清流塾では、研修のみならず、業界全体の喫緊の課題である幼稚園教諭のなり手不足を少しでも解消したいとの願いを持ち、令和2年度から県内の教員養成校において「出前講座」を行

っています。出前講座は毎回 3 名の塾生が講師として出向き、就職した先輩の声や実習先の園での経験といった、これまで学生の皆さんが得てきた情報だけでなく、園を運営する立場での考え方や幼児教育の現場の声を学生に直接届けることで、幼稚園教諭に魅力とやりがいを感じ、志した夢にまっすぐ向かってもらえるのではないかと考えています。自園の紹介や求人活動を行うことはなく、幼稚園連合会の一員としての活動です。

講座を受けた学生からは「本来自分がどうして保育者になりたかったのかを再確認し、やっぱり保育者になりたい！と思った」「実習への不安がたくさんあったけれど、この講話を聴いて不安がなくなった」「先生方が子どもの写真を使って説明している時の自然な笑顔を見てこちらも笑顔になれた」「実習では辛いことだけを見るのではなく、楽しさに気づかないといけな
いと感じた」など、感謝と共に前向きな感想をたくさんいただきました。

幼稚園を運営し、先生たちと一緒に子ども達と関わる園長の話を聞くことで、それぞれが保育者を志したきっかけを思い出し、「保育者になりたい」という気持ちが強くなったのではないかと思います。我々は、出前講座が学生の皆さんにとってより分かり易く、幼稚園の魅力
を伝えることができる内容にブラッシュアップし、今後も組織をあげて県下の各教員養成校にてこのような講座を開催していくことで、多様な卒業生の皆さんを幼稚園教諭として迎えた
いと考えています。

編集後記 広報委員会の体制

この度、新たに広報委員会のメンバーが理事会にて決定しました。任期は 2 年となります。より一層読んでいただけるニュースレターを配信したいと思っております。どうぞよろしくお願
いいたします。

日本保育者養成教育学会 広報委員

○石井章仁(大妻女子大学) 上田敏丈(名古屋市立大学)
遠藤純子(昭和女子大学) 小久保圭一郎(倉敷市立短期大学)
櫻井裕介(西南女学院大学短期大学部)